2021 年 11 月記載

教えて！！漢方＆鍼灸「漢方と『糖尿病』（中編）」

附属東洋医学研究所
助教　宮川亨平

教えて！！漢方＆鍼灸

～ 漢方と「糖尿病」（中編） ～

前回は東洋・西洋での「糖尿病」の疾患概念の興りについて解説を行いました。
今回は古代中国の医学書においてどのような治療が記載されているかを書いていこうと思います。

まず『金匱要略』の中では「消渇」に対する治療としていくつかの方剤が記載されていますが、この中で現代でも頻用されているものが「腎気丸（八味地黄丸）」や「白虎加人参湯」です。昭和の漢方の名医である大塚敬節の治験ではこれらのうち「八味地黄丸」が効果を得ることが多いとされており、こと糖尿病に伴う視力低下には奏功するとされています。

実際に八味地黄丸はインスリン分泌促進やインスリン抵抗性の改善を示す臨床効果が確認されており、白虎加人参湯も血糖降下作用を示す実験結果が出ているなど、両剤共に西洋医学的にも効果を示す可能性が示唆されています。

前回登場した『千金方』にも同様に「消渇」に効果を示す方剤が記載されていますが、『金匱要略』に記載のあった八味地黄丸や白虎加人参湯は登場せず、「三黄丸（三黄瀉心湯）」が登場するに留まります。この三黄瀉心湯は明らかな糖尿病に対する効果は確認されていませんが、後世の日本では金瘡（創傷）に対して用いられている記録があり、何らかの創傷治癒効果を持っている可能性が考えられます。

特筆すべきは『千金方』には「消渇」の治療に用いる食品として牛乳・杏・酪（ヨーグルトに近い食品）が挙げられています。これらのうち牛乳・酪については糖尿病の発症を抑える可能性が指摘される低GI食品として知られており、杏も糖質の消化吸収を抑える効果が確認されているなど、糖尿病に対する効果が示唆されている食品となっています。

その原因も分かっていない疾患に対して、経験則で効果があるであろう方剤・食物に辿り着く観察眼・探究心はまさに驚くべきものです。

『諸病源候論』（610年）→『千金方』（7世紀半ば）→『外台秘要』（752年）と比較してみると、時代が下るにつれて「消渇」に対する記述は長くなり、治療法も多岐にわたるようになっています。これは580年に隋王朝が中国を統一して長く続いた戦乱の世に終止符を打ち、これに続く唐王朝の治世が行き渡って世情が安定して世の中が裕福になり、その結果「消渇」の患者数が増えてきた影響も少なからずあるでしょう。

一方日本でも畿内での戦乱が相次いだ飛鳥時代・奈良時代ではこういった「消渇」の記述は目立たないものの、同様に世情が安定した平安時代以降になって「消渇」の登場回数が激増することとなります。

平安時代の日本では医学書の編纂は活発ではなく、日本古来の和方をまとめた『大同類聚方』や新たに流入してきた中国医学をまとめた『医心方』に留まります。この『医心方』も基本的には中国の書物の引用であるため、先に挙げた『千金方』『外台秘要』などの内容から外れるものはほとんどありません。この時代の「消渇」の実態は、むしろ医学を専門としない貴族らの手による日記文学に詳しく描写されている傾向にあります。日記文学の中では「消渇」が「飲水病」という名で度々登場しています。この用語は中国医学書にはもちろん『医心方』にも記載はなく、俗称として広まっていたものと考えられます。

では、日本の日記文学ではこれらの「消渇」「飲水病」がどのように描かれていたのか、次回はこれを追っていくことにします。

12月号は**「漢方と『糖尿病』（後編）」**です。

ーーーーーーーーーー

参考文献
『金匱要略講話』（創元社、1979）
『校釈諸病源候論』（緑書房、1995）
『備急千金要方』（千金方刊行委員会、1976）
『東洋医学善本叢書 宋版外台秘要方 上』（東洋医学研究会、1981）
『医心方　巻十二 泌尿器科篇』（筑摩書房、2000）